

光の中でイエス・キリストと出会ったサウロは、その後しばらくアラビアへと退いていたことが、ガラテヤの信徒への手紙の中に記されています。サウロが使徒パウロとしてイエス様の福音を告げ知らせる働きをするまでには、相当の年月を必要としていました。サウロがまだ福音宣教の業に携わっていなかったころ、アンティオキアでは目覚ましい働きが起こされていきました。ヘブライ語を話すユダヤ人たちがギリシア語を話すユダヤ人たちに、イエス・キリストの福音を伝えました。すると今度は、ギリシア語を話すユダヤ人たちがギリシア語を話す異邦人、外国の人たちにイエス・キリストの福音を伝え始めたのです。こうしてイエス・キリストの福音は、ユダヤ人の枠を超えて広がっていきました。

アンティオキアは、ローマ帝国の中で、ローマ、アレクサンドリアに次ぐ第3の都市で、シリア州の首都として栄えました。当時は人口約50万人の大商業都市で、たくさんのユダヤ人たちも住み、ユダヤ教の会堂シナゴグもたくさんありました。シリア人、ギリシア人、ローマ人など多くの民族が住む都市で、シナゴグにも多くの人たちが出入りしていたことと思います。

わたくしごとで恐縮ですが、私たちもアメリカで日本語教会に行かなければ、教会に出会うことはありませんでした。クリスチャンにもならなかったでしょうし、まして牧師になってこうやってみなさんの前でお話しすることもなかったことでしょう。今から40年前の1986年3月、当時、外資系のICメーカーで働いていた私は、本社のあるアメリカ・テキサス州のダラスという町に配属になりました。今、世の中をにぎわせているワールドカップの日本代表が予選リーグでオランダと戦ったスタジアムのある、あのダラスです。結婚してまだ1年も経っていなかった私は、日本人のグループを探しました。それにはこんな理由がありました。私の先輩でアメリカに3ヵ月の予定で配属された方がおられましたが、その方も結婚したばかりでしたので夫婦そろってアメリカに行くことになりました。ところがそのお連れ合いがアメリカの生活に慣れずに、ノイローゼ気味になってしまったのです。当たり前のことですが、アメリカではテレビをつけても英語、電話も英語、買い物に出かけても英語の世界です。仕事をしている私たちは言葉がわからなくても何とか仕事をしなければなりません、一人で家にずっといる妻にとっては、それまでとはまったく違うたいへんな世界だったのです。ダラスはアメリカでもかなり大きな町だったのですが、日本人がとても少なく、日本人の交わりもほとんどありませんでした。そのような状況でしたから、3ヵ月の予定でアメリカに行った先輩は、お連れ合いが精神的に不安定になり、予定より1ヵ月早い2ヵ月間の滞在で帰国してしまいました。そんな出来事がありましたので、私も何とか日本人のグループを探したいと思い、それで日本語教会と出会い、教会に行くことになりました。その日本語教会は当時、とても小さな教会でしたが、私が最初に訪れた日がたまたまイースター礼拝で、その日の午後にはいつもは教会には来ない日本人学校の方々が集まり、みんなで公園に出かけてイースターの愛餐会を行いました。その食事に釣られて教会に行き出したのが、私が教会につながるきっかけでした。

テキサス州はとても大きな州で、テキサス州という一つの州だけで日本の面積の約2倍の広さがあります。そこに点在してある町々に、小さな日本人のクリスチャンのグループがたくさんありました。ほとんどの方々が、アメリカ人男性と結婚した日本人女性でした。

彼女たちはもうアメリカ生活が長かったので、家族でアメリカ人の教会に出席し、その教会でも女性会のリーダーを務めるなど、重要な働きをしている人たちもたくさんおられました。そんな彼女たちでしたが、定期的に日本人だけで集まり、日本語の礼拝を持っていました。けれども、地方の小さなグループでは日本人の専任牧師を招聘できなかったのも、ダラスにあった私たちの日本語教会の牧師が毎週、それらの町へと出かけて行って、小さな日本人グループの人たちと一緒に礼拝を行っていました。その中でも比較的大きなグループがあったサンアントニオの町は、ダラスから500キロほど離れたところにありました。私たちの日本語教会の牧師は毎週、ダラスの礼拝が終わると500キロの道のりを車で約5時間かけて出かけて行って、日曜日の夜と月曜日の朝の2回、日本人グループの人たちのために日本語の礼拝を行っていました。

アメリカの日本人キリスト者たちは、アメリカ人の教会でそれぞれが重要な働きをなしていたにもかかわらず、なぜ日本語の礼拝にこだわっていたのでしょうか。私はふと疑問に思い、あるとき、サンアントニオのあるご婦人に伺ったことがあります。するとこんな答えが返ってきました。「確かにアメリカでの生活が長いから、英語の礼拝に出ていても別に不自由なことはありません。でも、福音を母国語の日本語で聞くと、乾いた砂に水がスーッと沁み込んでいくように、心の中に御言葉が沁み込んでくるのです」。

今日の聖書の箇所、19節には、ステファノが殉教してしまった事件をきっかけにして起こったキリスト教の迫害のために地方に散らされていった人々が、フェニキア、キプロス、アンティオキアでキリストの福音を宣べ伝えたことが記されていますが、聖書に記されていますように、彼らは最初、ユダヤ人以外のだれにも福音を語りませんでした。おそらく当初は、ユダヤ人が使っていたヘブライ語だけで福音が語られていったのでしょう。けれども、アンティオキアはユダヤ地方ではありませんでしたので、生まれてからずっとギリシア語で育ったユダヤ人でヘブライ語が不得意な人たちもだんだんと増えていったのではないのでしょうか。アメリカの日本語教会でもそうでした。日本人の二世、三世は、難しい日本語よりも英語の方を早く覚え、日常会話は英語で話をする人の方が多くいました。ですから、アメリカの日本語教会なのに日本語のメッセージを英語で通訳するという妙なことも起こりました。アメリカの日本語教会には、日本人だけではなく、日本人と結婚したアメリカ人、中国や韓国にルーツを持つ方々、また日本語に興味を持って出席するアメリカの人たちもいました。今日の聖書の箇所に出てくるアンティオキアの教会は、きっとそんな感じの教会だったのではないかと思います。そのアンティオキア教会で、まずヘブライ語で福音が語られていき、次第にギリシア語しかわからない人たちのために、ギリシア語でも福音が語られていった。この神戸西教会でも、英語や他の国の言葉で礼拝ができるなら、もっともっと可能性が広がってくるのではないのでしょうか。今年度、新たに掲げられた神戸西教会の3本柱の一つ、地域伝道・近隣伝道・家族伝道の働きの中には、母国語で礼拝することが困難な外国の方々もそこに含まれているのでしょう。さまざまな国の言葉で礼拝ができること。そこに礼拝の豊かさがあるのかもしれない。

今日の聖書の箇所で、エルサレムから派遣されたバルナバはサウロを探し出します。バルナバはサウロのうわさを聞き、自分と共に働くパートナーとしてサウロを選び、見つけ出すのです。サウロはかつて、クリスチャンを根絶やしにしようとして迫害した張本人でした。聖書にはかつての敵が友となって働くといううるわしい話として描かれています。

そんな簡単な話ではなかったはずです。バルナバはきつこう思ったことでしょう。サウロという人物はイエス・キリストと出会い、回心してキリストの福音を宣べ伝えていると聞いているが、本当に信用できるのだろうか。そして、サウロ自身も葛藤を抱えていたことでしょう。かつてはキリスト者たちを捕まえては牢に入れていたサウロが、光の中で復活の主イエス・キリストと出会い、イエス・キリストを信じる者となった。けれどもそんな自分が、はたしてイエス・キリストの福音を宣べ伝えるのにふさわしいのだろうか。それぞれの思いの中で、それぞれの葛藤を乗り越え、彼らは友となっていくのです。そしてこの出来事は、使徒言行録6章に出てくる出来事、ヘブライ語を話すユダヤ人とギリシア語を話すユダヤ人とが対立していたあの出来事を思い起こさせます。ギリシア語を話すユダヤ人たちから、言葉が通じないことによって食事の分配に不平等が生じて苦情が出た。この出来事に対応するために、教会は執事を選び出します。このように、かつてギリシア語を話すユダヤ人とヘブライ語を話すユダヤ人とが対立していたにもかかわらず、アンティオキア教会においては、ヘブライ語を話すユダヤ人からギリシア語を話すユダヤ人へ、そしてギリシア語を話す外国の人たち、すなわち、世界中の人たちへとキリストの福音が広がっていくという、豊かな福音の広がりが起こされていったのです。

今日の聖書の最後の段落では、世界中で起こった大飢饉の際に、アンティオキアの教会の人たちがそれぞれの力に応じて、エルサレムの教会の人たちを援助したことが記されています。最初、言葉の違いによって待遇に差が出てきた問題が起こった初代教会で、その言葉の違いによって福音が外国の人たちにまで広がっていきました。言葉の違いによって起きた対立が、言葉の違いの豊かさによって、言葉を超えて福音が広がって行ったのです。そして、アンティオキア教会は福音を広めていっただけではなく、世界中に起こった大飢饉の際に、教会の人々がそれぞれの力に応じて援助の品々を送る働きを担っていきました。その中でもとりわけ、29節に記されていますように、ユダヤに住む兄弟たちの援助の品を送っていました。ユダヤに住むキリスト者たち。特にエルサレムで働いていたエルサレム教会は、かつてサウロがクリスチャンを捕まえては牢に入れていたように、ユダヤ教の人たちによって厳しい弾圧を受けていました。その中で苦闘しながら教会活動を行っていたエルサレム教会への物質的な支援は、この後、パウロにとってとても重要な働きとなっていきます。このようにして、ダマスコの途上で復活の主イエス・キリストと出会って回心したパウロは、キリスト教の原点となったエルサレム教会を支援し続けていくのです。

私たち神戸西教会が加盟しております日本バプテスト連盟は、協力伝道体です。それぞれの教会が協力し合って、キリストの福音を宣べ伝えていく活動をしています。そしてこの神戸西教会は、日本バプテスト連盟の全国拠点開拓伝道の働きの中で生まれてきた教会です。全国拠点開拓伝道とは、日本バプテスト連盟の年次総会において決議された拠点となるところに教会を建てるために、全国から集められた献金を用いて建てられた教会です。すなわち、この神戸西教会は全国にある日本バプテスト連盟の諸教会・伝道所の祈りと献げ物によって、神戸教会を母教会として立てられた教会なのです。全国からの祈りと献げ物とをいただいて、この教会、この土地と会堂があることを私たちも覚えながら、私たちも全国の諸教会・伝道所を祈りと献げ物で支えていく教会、共に協力伝道の働きに携わっていく教会として立ち続けていきたいと願います。

お祈りしましょう。